

エリヤの絶望 (列王記上 19章)

列王記上 19章の背景

- イスラエルでは3年間続いた干ばつがあった(18:1)
- アハブは長い間、エリヤを各国で探し続けていた(18:10)
- イゼベルはその間、主の預言者たちを滅ぼしていた(18:4)
- エリヤは主の命によりアハブに会いに行く(18:2)
- アハブ:「イスラエルを悩ませる者よ、お前か?」(18:17)
- エリヤ:「イスラエルを悩ませているのはあなたとあなたの家族です - バアル崇拜の結果です」
- バアルの預言者450人 + アセラの預言者400人との火の対決を提案
- エリヤのカルメル山での対決(民の前で)と勝利(18章 20-40節)
- エリヤ-民:
神様への態度を決定するように促す、「主の預言者は私一人だけ残っている...」
- バアルの預言者たちを嘲笑する(18:27)
- 主に大胆な祈りを捧げる(18:36-37)
- バアルの預言者たちを全て捕らえ、殺す(18:40)

列王記上第19章の物語の背景

- 雨を求める切実な祈り - その応答として大雨が降る(18:41-46)
- アハブに大胆に告げる(18:44)
- 主の力が働き、大雨の中で腰を締め、アハブの馬車の中でイスラエルまで走る(18:46)

列王記上第19章

- イゼベルが明日エリヤの命を奪うと警告する(19:2)
- エリヤは命のために逃げ、ベエルシェバに行く(19:3)
- 一人で荒野に進み、ジュニパーの木の下で主に死を求める(19:4)

→ **エリヤが死を求めるほどの深い落胆と絶望の中にあっただことを示している。**

(質問) **エリヤの落胆と絶望の原因は何だったのか?**

エリヤの落胆と絶望の原因は一体何か?

● イゼベルの殺害脅迫への恐れ?

火の対決前のエリヤの言動、火の対決の状況など、荒野に逃げる直前までエリヤが示した姿は? ⇒ 明らかに不当な理由

- 火の対決前、すでにアハブは長い干ばつの責任をエリヤに問おうと何年もエリヤを探していたにもかかわらず、命の危険を冒してアハブに会った。
- 火の対決で負けることが明らかであるにもかかわらず、最初に対決を提案した。
- バアルの預言者たちの前で堂々と、少しも恐れを見せなかった。
- 主の力による超自然的な勝利を収めた。
- バアルの預言者数百人を剣で殺した強い心。
- 大雨を降らせる祈りの力 + 主の能力が満ちており、アハブの前で雨の中を走った姿。
- 死を恐れて逃げた者が、逆に主に死を求める?

⇒ **単なる死への恐れで説明するには説得力がない!**

エリヤの落胆と絶望の原因は一体何なのか?

- '魂の暗い夜'? (キリスト教心理学)
- 'うつ病'?, '疲労'、'霊的停滞'?
- サタンの攻撃?

⇒ **説得力のない推測!**

⇒ 答えは聖書の本文そのものであり、特にエリヤの嘆きとそれに対する神の答えにある!

「エリヤはその場所の洞窟に入って、そこに留まっていると、主の言葉が彼に臨んで言った、『エリヤよ、なぜここにいるのか?』彼は答えた、『私は万軍の神、主に對して非常に熱心である。なぜなら、イスラエルの子らがあなたの契約を破り、あなたの祭壇を壊し、剣であなたの預言者たちを殺したからである。そして私だけが残っているが、彼らは私の命を奪おうとしている。』」(19:9-10, 13-14)

⇒ **エリヤは自分がイスラエルの中で唯一の「イスラエルの残り者」とであると固く信じていた。**

エリヤの失望と絶望の真の原因

第一に、エリヤは自分の民、すなわち神の契約の民として召されたイスラエルが、全て主を裏切り、**バアルを崇拜する悲惨な現実**に絶望していた。

火の対決での劇的かつ圧倒的な勝利とは?

→ **ただ神の全能の力によるエリヤ個人の勝利に過ぎない。**

→ **イスラエルの民が主に対する裏切りから立ち返ったという証拠は全くない。** 19:10節でのエリヤの答え。

エリヤの絶望の第一の原因は、神の民として召された自分の民族が、神の契約を裏切るイスラエルが直面している悲惨たる霊的現実であった。

→ **決して自分の命への恐れではない。**

エリヤの落胆と絶望の真の原因

次に、エリヤは18:22と19:10、14節から見て取れるように、神の預言者は皆殺され、自分だけが唯一の神の預言者だと信じていました。すなわち、彼は自分が唯一の『イスラエルの残り者』だと信じていました。

- しかし、イゼベルは彼自身をも殺そうとしています。
もしエリヤが自分自身をも失ったら？
→『イスラエルの残り者』が消えることになる
→神がイスラエルとの契約関係を維持する唯一の糸が失われることになる
→イスラエルはもはや神の民ではなく、神に見捨てられることになる
⇒ **これこそがエリヤが絶望した真の原因です。**

エリヤの落胆と絶望の真の原因

エリヤの絶望は、

- 個人的な生命や安全に対する懸念や恐れ、または突然訪れた個人的な精神的、霊的、または信仰的危機によるものではなかった。
- それは、聖なる契約の民として召された愛する自民族が直面している絶望的な霊的破綻の現実及び『残り者』の消滅によって、神からその民族が永遠に見捨てられる状況に直面していることから来る絶望であった。

神の答え – 7000人の残された者がいる

- 神の答えによって明らかになるエリヤの絶望の真の原因: **「残された者」の存在**
「しかし、私はイスラエルの中に七千人を残す。彼らは皆、バアルにひざまずかず、バアルに口づけしなかった者たちである。」(19:18)
- 神の答えは、エリヤだけでなく七千人の「イスラエルの残された者」がいるということであった。もしエリヤの絶望の原因が単に自分の死への恐れや鬱、魂の暗さにあったのなら、これがエリヤにどんな慰めを与えることができ、どうやって彼を絶望から救い出すことができただろうか？
- しかし、神の答えはまさにエリヤの絶望の原因を貫き、それを癒すものであった。**イスラエルにはエリヤ以外にも七千人の残された者がいるならば、イスラエルと神との契約関係は依然として有効である。**彼らはイスラエルが神に見捨てられていない証拠である。自分の民には希望があるのだ。それならば、自分の一つの命はたとえ殺されても構わないのである。
→ **ローマ人への手紙 11:1-5節における使徒パウロの論証の核心**

イスラエルを見捨てない証拠

イスラエルの「残り者」の存在

「神が自らのために恵みによって[選ばれた]残り者を残すことは、民族的な約束への契約金として、また遺産に対する神聖な証明として存在する。」(J. Lanier Burns, "ローマ人への手紙11章における民族イスラエルの未来")

「使徒パウロは自身の信仰を、民族が拒絶されていない証拠として提示した。彼はまた、「恵みに選ばれた残り者」(ローマ11:5)が神が民族全体を拒絶していない証拠であると確信している。パウロはここで「全体は義なる残り者によって聖なるものとされる」という集団的代表性の原則を適用している。」(ジャスター, 『取り消せない召命』82)

エリヤの治療の場所 – シナイ山: 契約の最初の場所

- 神がエリヤを癒す場所はどこか？
→シナイ山、イスラエルの民が神と最初の契約を結んだ場所。
- シナイ山まで40日間、昼夜を問わずエリヤを導く。
→40年間、荒野で常に試練に立ち向かうイスラエルを忍耐し、最終的にイスラエルに契約を守らせた神の信実さを思い出させる。
- 最初の契約の地で7,000人のイスラエルの残り者がいることを知らせる。
→イスラエルとの契約が有効であることを確認する。
- イスラエルに対する契約が神から確認されたエリヤ。
→真の絶望の原因が解消される。
→新たな力と使命を受けて旅立つ。